

吉塚本町遺跡

—吉塚本町遺跡第4次調査報告書—

1994

福岡市教育委員会

吉塚本町遺跡

—吉塚本町遺跡第4次調査報告書—



1994
福岡市教育委員会

序

福岡平野は古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきました。そのために福岡市市域には、多くの埋蔵文化財が分布しています。

しかし、近年の福岡市の著しい都市化にともない失われる遺跡も多くあり、福岡市教育委員会ではそれらの遺跡について事前に発掘調査をおこない、記録の保存に努めています。

本書は道路建設に伴い平成5年度に発掘調査をおこなった吉塚本町遺跡の第4次調査の成果を報告するものです。

調査の結果は、弥生時代から中世に及ぶ集落跡が発見されました。また、生活に使用された様々な遺物が見つかりました。この中には漁網錘や製塩土器などがあり、海に生業の糧を求めていた人々の様子がしのばれます。これらは約1000年間にわたる古代吉塚村の歴史を物語る貴重な資料です。

本書が地域の文化財ならびに歴史に対する認識と理解を深める一助となれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり、数々のご協力をいただいた住宅都市整備公団ならびに地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾 花 剛

例　　言

- 1、本書は福岡市土木局道路建設部街路課による道路工事に先立つ吉塚本町遺跡第4次調査の報告書である。
- 2、発掘調査は福岡市教育委員会が主体となり、平成5（1993）年4月15日～5月26日におこなった。
- 3、本書に使用した遺構の実測は吉留秀敏、井英明がおこなった。遺物の実測は井英明がおこなった。
- 4、本書に使用した写真は吉留秀敏、井英明が撮影した。
- 5、本書に使用した方位は磁北である。
- 6、本書の執筆は井英明がおこなった。
- 7、本書の編集は吉留秀敏と協議の上、井英明がおこなった。

本文目次

	頁
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経過と組織	1
3. 歴史的、地理的環境	3
4. これまでの調査	3
5. 調査の記録	5
1) 発掘調査の記録	5
2) 検出遺構と遺物	7
3) その他の出土遺物	11
6. まとめ	16

挿図目次

	頁
図1. 吉塚本町遺跡と周辺遺跡 (1/25,000)	2
図2. 吉塚本町遺跡調査地点位置図 (1/5,000)	4
図3. 吉塚本町遺跡第4次調査地点位置図 (1/1,000)	5
図4. 吉塚本町遺跡第4次調査地点遺構配置図 (1/300)	6
図5. 主な遺構実測図(1) (1/60)	8
図6. 主な遺構実測図(2) (1/60)	9
図7. 遺構出土遺物 (1/3・1/4・1/6)	10
図8. 包含層及びその他の出土遺物(1) (1/4)	12
図9. 包含層及びその他の出土遺物(2) (1/4・1/6)	13
図10. 包含層及びその他の出土遺物(3) (1/4)	14
図11. 包含層及びその他の出土遺物(4) (1/3)	15

表目次

	頁
表1. 主要遺構一覧表	9
表2. 土錐計測一覧表	15

図版目次

- 図版 1 1. 調査前近景（北から）
2. 道路面除去作業（南から）
- 図版 2 1. 南半部調査風景（南から）
2. 南半部完掘状況（北から）
- 図版 3 1. 北半部調査風景
2. 北半部完掘状況
3. 調査終了時全景（北から）
- 図版 4 1. 土壌 S K05 土層断面（東から）
2. 土壌 S K08 上層断面（南から）
3. 土壌 S K31 土層断面（南から）
4. 土壌 S K07 半掘状況（北東から）
5. 土壌 S K06 半掘状況（北から）
6. 土壌 S K31 完掘状況（北から）

1. 調査に至る経過

福岡市博多区吉塚本町に分布する吉塚本町遺跡は、平成2（1990）年におこなわれた試掘調査とその後の第1次調査によって、周知されるところとなった。本遺跡は、6世紀末～8世紀後半の遺構、遺物を主とした集落遺跡であり、そうした遺構の拡がりや分布がどの範囲まで拡がっているのか問題とされるところであった。

平成4（1992）年11月2日博多区吉塚本町130-2に福岡市土木局道路建設部街路課（以下「甲」とする）より、都市計画道路（吉塚市街地整備2号線）の建設に伴う埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けた福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下「乙」とする）では、同年11月5日に試掘調査を実施した。

申請地の南東側は平成2（1990）年に福岡市教育委員会、平成3（1991）年には福岡県教育委員会が調査をおこなっており、遺跡の存在は確実なところであった。しかし、申請地が旧国鉄操車場跡地であることから、当時の施設運営による擾乱がどの程度であるかが問題であった。試掘調査は、申請地に4カ所のトレンチを設けておこなった。その結果、地表下70～160cmで遺構面の砂丘を検出、申請地全体に遺構の分布が認められ、擾乱もさほど見られなかった。この結果を受けて、甲、乙両者は協議を重ね、建設に伴い遺跡の保存は困難であると判断し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。同年11月甲、乙両者は発掘調査委託契約書を締結した。

2. 調査の経過と組織

発掘調査は、当初試掘調査の成果を受けて平成5（1993）年4月15日～同年6月14日の予定で開始した。しかし、調査地北側は遺存状態が悪く、擾乱は思いの他激しかった。その結果、当初の予定よりも早く調査は進行し、調査期間を平成5（1993）年5月26日に変更、短縮することとなつた。なお、出土遺物や図面、写真などの整理作業は引き続きおこなつた。

調査に際しては、以下に示す組織を構成した。相次ぐ緊急調査により、十分なる体制を組むことは出来なかつたが、関係各位の多人なる協力のもとに、調査が順調、かつ無事に進められた。記して感謝の意を表したい。

調査委託者：福岡市土木局道路建設部街路課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第二係

教　育　長：尾花　剛

部　　長：後藤　直

課　　長：折尾　学

第二係長：山崎純男

調査庶務：寺崎（入江）幸男

試掘調査：吉武 学

調査担当：吉留秀敏

調査補助：井 英明

調査作業：梅本不二男 浦伸英 熊本義徳 洪谷博文 立石真二 森恒隆視 森山恭助
三浦力 駒田栄 森山タツエ

整理作業：尾崎君枝 甲斐田嘉子 木村良子 丸井節子 宮坂環 森部順子

整理補助：井英明

調査協力：亀井明徳 菅波正人 住宅・都市整備公團

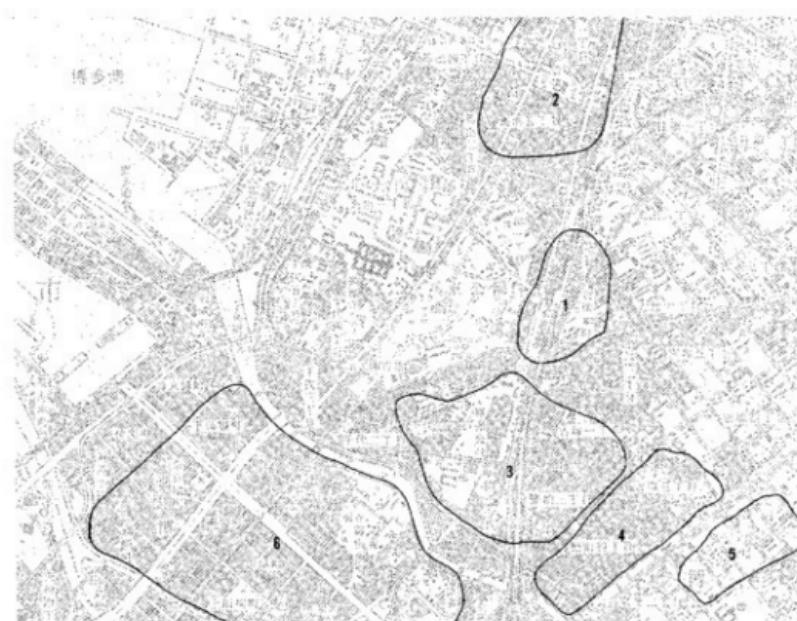


図1. 吉塚本町遺跡と周辺遺跡(1/25,000)

1. 吉塚本町遺跡 2. 箱崎遺跡群 3. 堅粕遺跡群 4. 吉塚遺跡群
5. 留遺跡群 6. 博多遺跡群

3. 歴史的、地理的環境

博多湾の南岸には、海浜砂、そして風成砂からなる新砂丘（箱崎砂層を基盤とする）が発達している。この砂丘は、東区箱崎から博多区呉服町、中央区天神、早良区西新町を経て室見川河口に至る範囲に主として分布しており、海岸部に平行して幾列かの砂丘を形成している。

吉塚本町遺跡も、こうした縄文時代後期以降に形成された標高3～4mの砂丘上に立地している。南側を御笠川、北を多々良川の支流である宇美川とで囲まれた古墳時代～奈良時代を中心とする集落遺跡である。

本遺跡の周辺には、こうした地形上に立地する遺跡が分布している。本遺跡の北側にあたる箱崎（馬出）遺跡群は、11世紀～15世紀にわたる集落遺跡である。第2次調査では、江戸時代に描かれた箱崎宮の絵図に見られる「赤幡坊」の建物跡と推定された遺構（建物地業）など、隣接する箱崎宮の関連遺構、遺物が検出されている。南側に位置する吉塚遺跡群は、弥生時代から中世にかけての遺跡であり、貨泉をはじめ当該期の遺構、遺物が多数検出されている。吉塚遺跡群より内陸では後背湿地が形成され、そこには豈遺跡群が分布しており、更に内陸では桜田遺跡群が分布している。吉塚遺跡群の西側に位置する堅粕遺跡群は、弥生時代から中世にわたる遺跡であり、第1次調査では包含層から貨泉が検出され、古墳時代の遺構では、第2次調査に前期の方形周溝墓、第4次調査では馬具を伴った上塙墓が検出されている。更に古代の遺構では、第4次調査において綠釉綠彩壺を副葬した木棺墓が検出されている。更に堅粕遺跡群の南西には、現在の御笠川に隔てられて博多遺跡群がある。高速鉄道建設に伴う発掘調査を発端に、これまで80次を超える調査がおこなわれ、現在も調査進行中である。博多遺跡群は、近くとも弥生時代前期を初現とし、その後河口部の陸地化に伴って次第に拡大している。これまで実施された調査から、古代、中世を主とする遺跡であり、検出された多数の遺構、遺物、とりわけ多量の貿易陶磁器の検出は、対外交渉の提点であったことを示すものである。

4. これまでの調査

吉塚本町遺跡は、今回の調査を含めて計4次の調査が実施されている。ここでは、第3次調査までの成果を概述する。

第1次調査 本調査区の南東隣接地であり、住宅都市整備公団の住宅建設に伴って実施された記録保存のための調査である。調査期間は、1990年8月20日～同年12月27日で面積2,380m²を調査した。報告は、調査主体である福岡市教育委員会埋蔵文化財課より、1993年に発刊されている。

調査では、6世紀末から8世紀後半を主とする遺構、遺物が検出された。遺構では、当該期

の竪穴状遺構、掘立柱建物、土壙など、遺物では、土師器、須恵器、布目瓦、移動式竈、製塩土器、土鍤などが検出され、また、弥生時代後期に位置づけられる複合口縁壺、甕などの土器と共に、有茎式の銅鏡、滑石製の石鍤などが検出された。

第2次調査 本調査区の北側であり、駅前広場と道路の建設に伴って実施された記録保存のための調査である。調査期間は、1991年9月5日～同年12月7日で面積1,900m²を調査した。報告は、調査主体である福岡市教育委員会埋蔵文化財課より、1993年に発刊されている。

調査では、古墳時代前期の土壙・基、近現代の旧国鉄操車場の基礎などの遺構が検出された。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、貿易陶磁器などと共に、縄文晩期の粗製甕が少量検出された。

第3次調査 本調査区の南東隣接地で、1次調査地点の北側隣接地にあたる。福岡県中小企業新興センター（仮称）建設に伴って実施された記録保存のための調査である。調査期間は、1991年9月18日～同年12月27日で面積約850m²、福岡県教育委員会文化課が調査主体となって調査した。報告は、同教育委員会により1992年に発刊されている。

調査では6世紀末から8世紀後半を主とする多数の遺構、遺物が検出された。遺構では、掘立柱建物、竪穴状遺構、土壙、土壙墓、溝状遺構など、遺物は、土師器、須恵器、移動式竈、瓦器、硯、綠釉陶器、青磁などや、土鍤、紡錘車、砥石などの土製品、石製品がある。また、縄文晩期に位置づけられる土器片や打製石斧、弥生時代中期頃の土器片も少量ながら検出された。

以上これまでの調査を概述した。調査地点は、いずれも旧国鉄操車場の跡地に位置することから、当時の施設の基礎、ゴミ穴などにより、それ以前の遺構はかなりの搅乱を受けていた。



図2.吉塚本町遺跡調査地点位置図(1/5,000)

5. 調査の記録

1) 発掘調査の記録

調査対象地は、道路で調査前の標高が約4.0mであった。調査は、隣接する公団住宅建設との兼ね合いもあり、調査方法としてⅠ期、Ⅱ期と工程を設け、調査区南側のⅠ期分をⅠ区、北側Ⅱ期分をⅡ区とし、調査区の南側から10m間隔でグリッドを設けた。更に、公団側との境界（調査区東側）は、協議の結果安全上境界線より50cmの引きを取り、JR側との境界（調査区西側）は、現歩道部分の下部が軟弱な地盤であることから、全面的な調査は危険と判断し、未調査部分を断続的に残して調査した。なお、この部分は調査後速やかに埋め戻しながら作業をおこなった。また、調査対象地中央に残された側溝は、基礎が深く遺跡の包含層を抜いていたため調査不要と判断した。以上のことから、調査対象面積1193.05m²の内786m²について発掘調査を実施することとなった。

調査は、対象地が道路部分であることからアスファルトにカッターを入れ、その後重機によって地表下0.8~1.5m前後の造成土を除去し、以下手作業により掘り下げを行った。黄褐色砂の包含層は厚さ10~30cm程度であり、古墳時代~奈良時代の遺物を主として含む。黄褐色砂層の下層は黄白色砂層であり、遺構検出作業は、黄褐色砂層から黄白色砂層にかけての黄褐色砂層下位でおこなった。遺構面の標高は2.5~3.0mであり、土師器、須恵器、土錐などの古墳時代~奈良時代にわたる遺物、それらを伴う遺構を検出した。



図3. 吉塚本町遺跡第4次調査地点位置図(1/1,000)

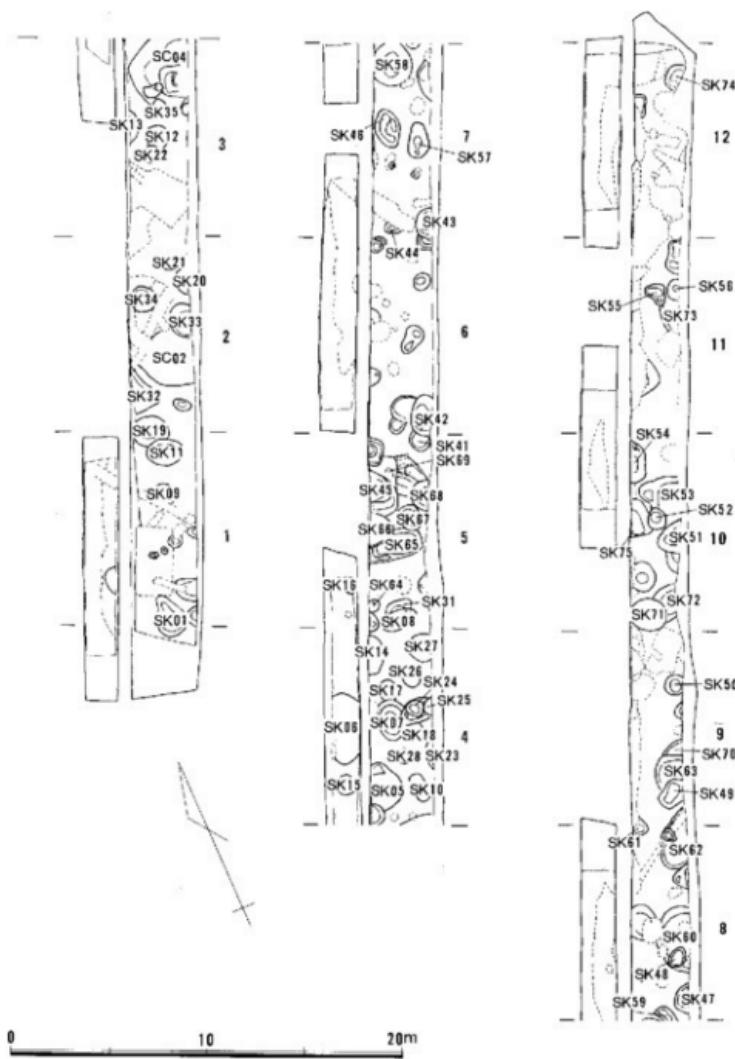


図4.吉塚本町遺跡第4次地点遺構配置図(1/300)

2) 検出遺構と遺物(図5、6)

S K01 調査区南端にある。遺物は古式土師器などを検出した。図7-1は古式土師器甕。口縁はきつく折れ曲がり、口唇部はヨコナデで整えられる。

S C04 調査区I区中央にあり南東側調査区外にのびる。埋土中からは少量の遺物を検出した。図7-2は古式土師器鉢。復元口径約14.6cm、器高約3cm。内外面共に丁寧なヘラミガキによって整えられる。口縁は起きず、頸部の屈曲もわずかである。3は須恵器壺。4は須恵器長颈壺。胴部最大径約16cm、胴部最大径部分より上に三条の凹線が入る。

S K05 調査区I区中央寄りにあり西側は側溝に切られる。遺物は古式土師器などを検出した。図7-5は古式土師器高壺。復元口径約15.2cm。壺部下半にカキメが入る以外はヨコナデで整えられる。

S K13 調査区I区中央にあり北西側は側溝に切られる。遺物は弥生土器などを検出した。図7-6は弥生土器甕で復元口径約18.2cm、胴部最大径約17cm。胴部外面はハケメが入り、口縁部は外へ開く、口唇部には沈線が一条部分的にに入る。

S K20 調査区I区中央寄りにあり南東側調査区外にのびる。埋土中からは少量の遺物を検出した。図7-7は土師器甕で復元口径約18.2cm。8は青磁刻花紋碗で復元高台径約4.6cm。

S K32 調査区I区中央寄りにあり北西側は側溝に切られる。遺物は土師器などを検出した。図7-9は土師器甕で復元口径約18.6cm。口縁部外面は横方向のハケメ、内面は斜方向のハケメ、頸部より下は斜方向のヘラケズリが入る。

S K42 調査区II区南側にある。S K41を切り南東側調査区外へのびる。遺物は須恵器などを検出した。図7-10は須恵器の壺身で復元高台径約9.4cm、高台部分は外へ張出す。

S K48 調査区II区中央にありS K60を切る。遺物は須恵器などを検出した。図7-11は須恵器の大甕。頸部中位とその上部にそれぞれ凹線が二条入り、その凹線で画された間にカキメの後、斜行文が入る。

S K51 調査区II区中央寄りにあり南東側調査区外にのびる。遺物は土師器などを検出した。図7-12は土師器の高台付き壺で復元高台径約7cm。高台は高い。

S K53 調査区II区中央寄りにあり南東側調査区外へのびる。南側をS K51、53に切られる。遺物は土師器などを検出した。図7-13は土師器皿で復元口径約23cm、器高約1.5cm。内外面共にヨコナデの後丁寧なヘラミガキを施す。

S K56 調査区II区北側にあり、南東側調査区外にのびる。遺物は須恵器などを検出している。図7-14は須恵器壺身で復元口径約10.2cm。

S K58 調査区II区中央寄りにあり北西側は側溝に切られる。遺物は須恵器などを検出した。図7-15~19は須恵器壺蓋で口縁端部は嘴状を呈し低平である。15は復元口径約13.9cm、端部は嘴状を呈すが曲折は強い。16は復元口径約13.8cm、端部の曲折は15に比べ鈍い。17は復元口

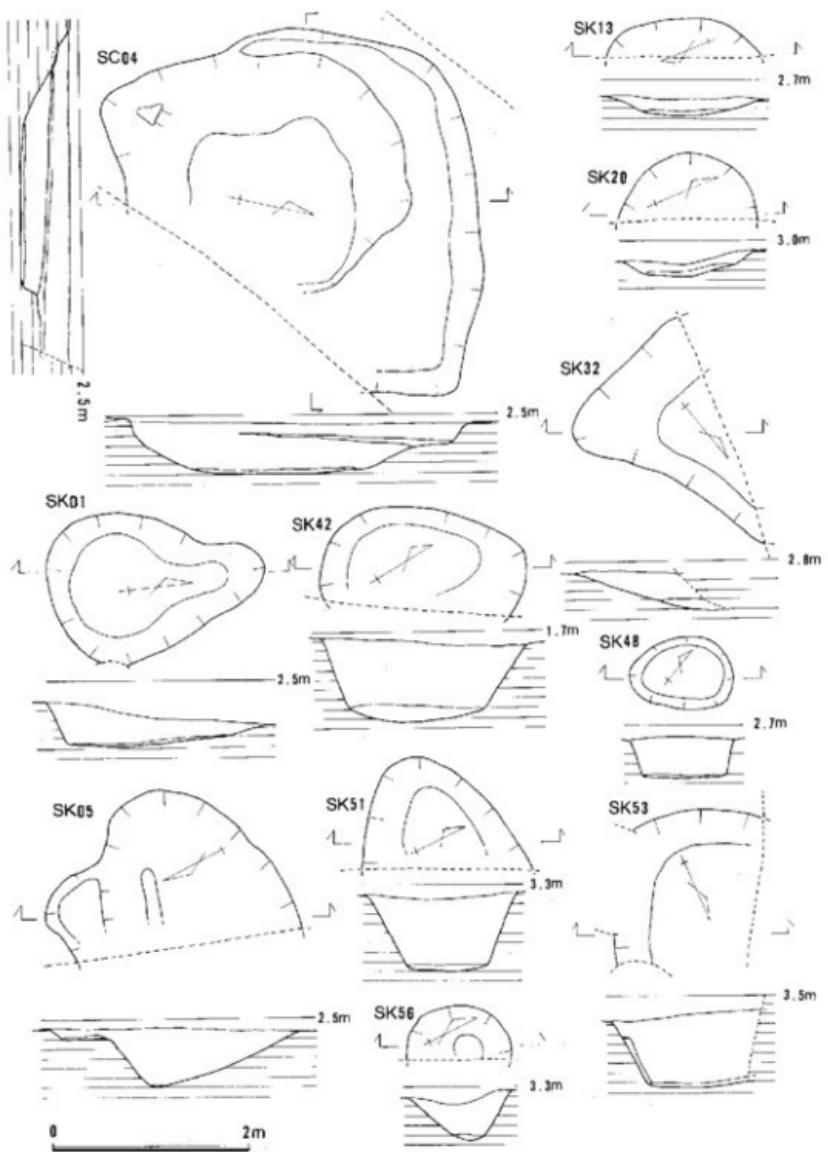


図5. 主な遺構実測図(1)(1 / 60)

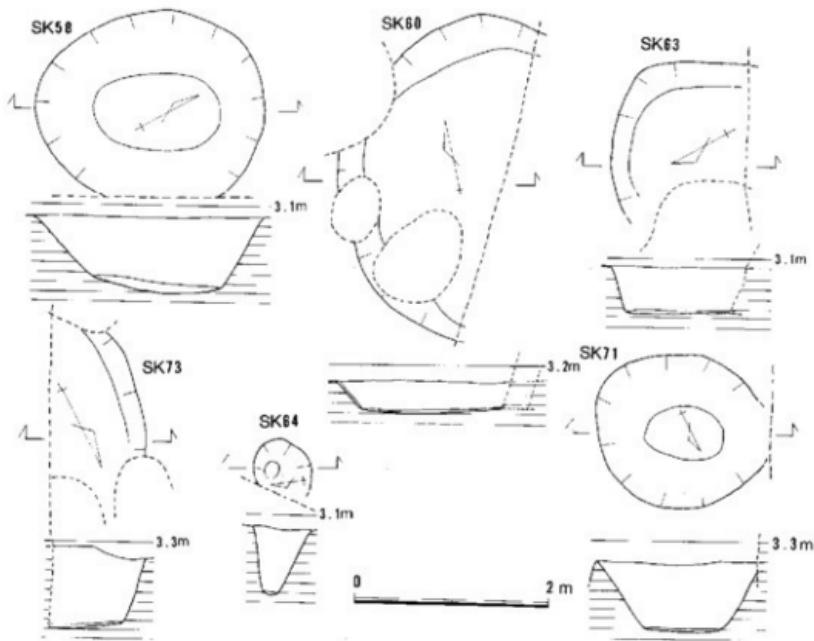


図6. 主な造構実測図(2)(1/60)

主要造構一覧表

造構	長径×短径(cm)	深さ(cm)	平面形	造構	長径×短径(cm)	深さ(cm)	平面形
S K01	220×155	46	箱型	S K56	108×-	50	円形
S C04	386×380	58	閉じた方形	S K60	236×(200)	80	円形
S K05	(260)×258	62	-	S K63	(310)×-	(34)	-
S K13	(160)×-	(21)	-	S K64	(66)×(50)	70	円形
S K20	(142)×-	(26)	-	S K70	-	35	-
S K32	(240)×(180)	(40)	-	S K71	(170)×138	72	円形
S K42	210×(120)	87	椭円形	S K72	-	(70)	-
S K48	108×76	42	卵形	S K73	-	(85)	-
S K51	-×(180)	(80)	-				
S K53	(200)×(190)	(80)	-				

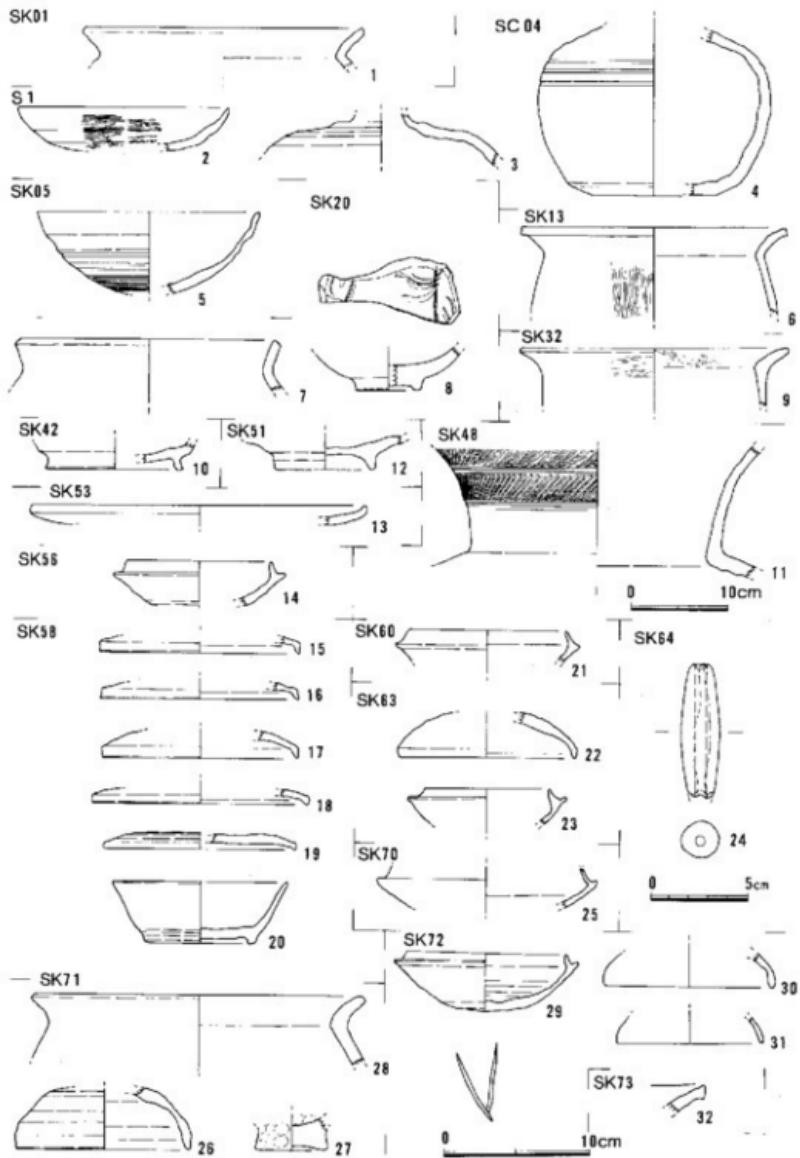


図7. 造構出土遺物(1／3・1／4・1／6)

径約13.6cm、更に曲折は鈍くなる。18は復元口径約15cm、より低平となる。19は復元口径15.4cm、20は須恵器の高台付き环身で復元口径約12.2cm、器高約4.2cm、高台径約8cm。

S K60 調査区II区中央にあり南東側調査区外にのびる。遺物は須恵器などを検出した。図7-21は須恵器环身で復元口径約10.8cm、受口部は長く内傾している。

S K63 調査区II区中央にある。南東側調査区外にのび、S K70を切る。S K49には切られる。遺物は須恵器などを検出した。図7-22は須恵器环蓋で復元口径約12.2cm、体部1/2以上を頂部にかけて静止ヘラケズリしており、その後指ナデ、オサエによって整える。23は須恵器环身で復元口径約8.6cm。口唇部分でゆるく立ち上がる。

S K64 調査区II区南端にあり西側は側溝に切られる。遺物は土鍾などを検出している。図7-24は土鍾である。紡錘形を呈する。

S K70 図示していないが、調査区II区中央にある。南東側調査区外にのび、S K63に切られる。遺物は須恵器などを検出している。図7-25は須恵器环身で受口部は薄く長く内傾している。復元口径約13.2cm。

S K71 調査区II区中央にあり、西側を側溝に切られる。埋土中からは少量の遺物を検出した。図7-26は須恵器环蓋で復元口径約11.9cm、生焼けである。27は製塙土器で底径5cm。全体を指オサエで整える。28は土師器甕で復元口径約23cm。

S K72 図示していないが、調査区II区中央にある。南東側調査区外にのびており、S K71に切られる。遺物は須恵器などを検出している。図7-29は須恵器环身で復元口径約11cm、器高約4cm。受口部は短くやや内傾し、底部にヘラ記号を有する。30、31は須恵器环蓋。30は復元口径約11.6cm、31は同約10cm。

S K73 調査区北側にある。南東側調査区外にのびており、北側をS K55、56に切られる。遺物は土師器などを検出している。図7-32は土師器壺。

3) その他の出土遺物

以下に記す出土遺物は、黄褐色砂包含層中と攪乱中からの検出である。遺物は特に調査区北側に集中していた。図8-33~36は弥生土器。33は甕で、口縁部は外へ開き口唇部に一条の沈線を有する。外面は斜方向のハケメ、内面頸部より下は、上位を斜方向のハケメ、下位は縱方向のハケメを行う。復元口径約26cm。34は器台である。35は壺の底部で底面をハケメで整えている。復元底径約7cm。36は壺の頸部片。37~44は古式上師器。37は甕で、全体をヨコナデで成形した後、外面にはヘラケズリが入る。38~42は壺。38は頸部外面はハケメ、内面はヘラケズリが入る。復元口径約10.8cm、胴部最大径約13.8cm。39は漸戸内系の波状口縁壺で、復元口径約10.8cm。40は口縁部内面に段を有する。復元口径約12.8cm。41は口縁部が一旦内彎した後ゆるやかに外へ開く。復元口径約13.6cm。42は強めのヨコナデで成形されたため稜が作られて

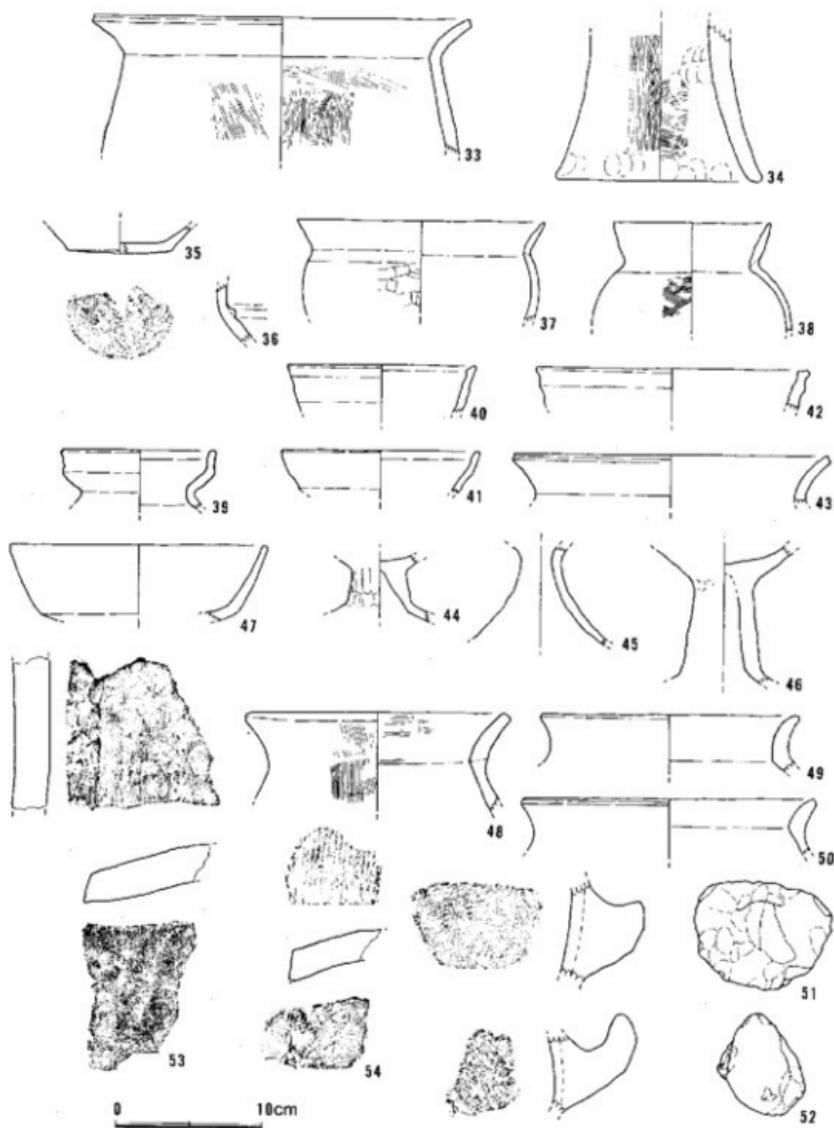


図8. 包含層及びその他の出土遺物(1)(1/4)

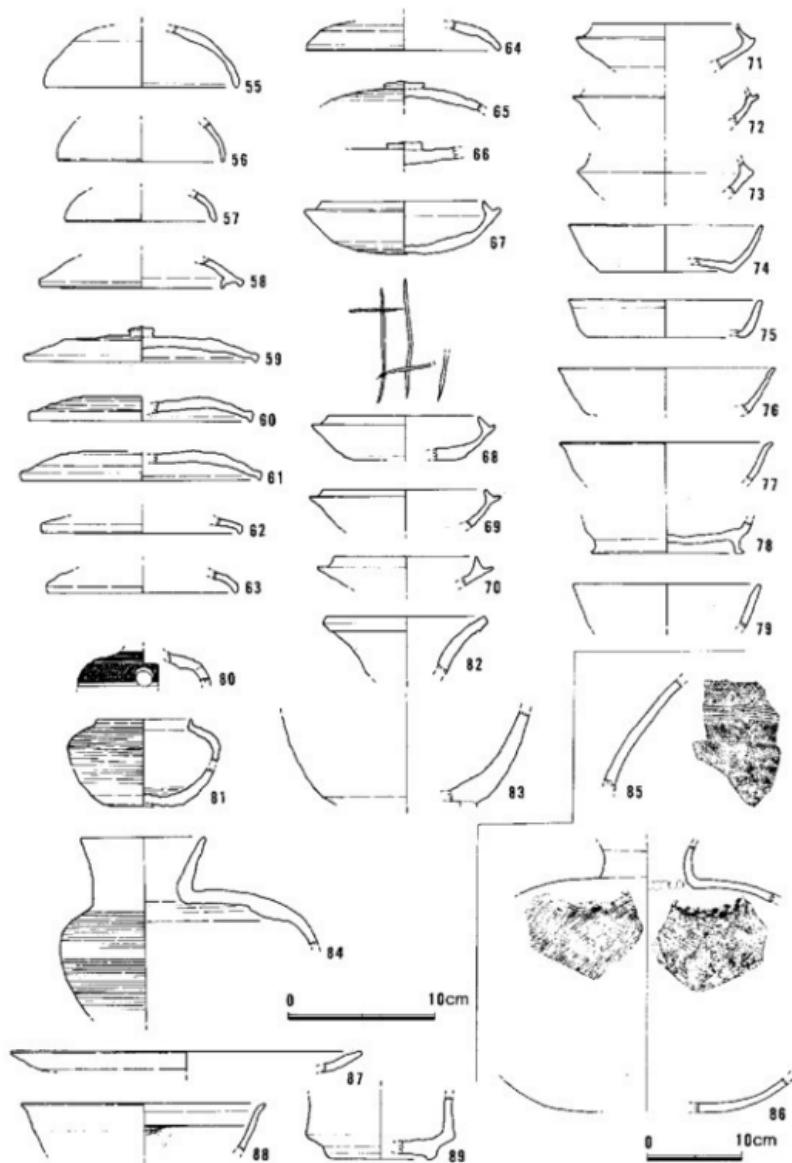


図9. 包含層及び他の出土遺物(2)(1/4・1/6)

いる。復元口径約18.6cm。43は壺で、口縁はゆるやかに外反する。復元口径約21.6cm。44は高环の軸部。外面は指オサエ、指ナデ、内面は粗いヘラケズリが若干入る。45、46は高环。45は内外面共にヨコナデで成形される。47は土師器壺で、全体をヨコナデで成形する。復元口径約17.6cm。48～50は土師器壺。48は外面を縱方向のハケメ、口縁内面を横方向のハケメ、頸部下はヘラケズリが入る。復元口径約18.3cm。49、50は内面に棱を持つ。49は復元口径約17.8cm。50は同約20.4cm。51、52は甌の把手部分。51は内面横方向のハケメが入る。把手部分の断面は略円形を呈する。52は内面縱方向のハケメが入る。把手部分の断面は楕円形を呈する。53、54は瓦。53の凸面は繩目タタキの後丁寧なナデ、凹面は布目痕をヘラケズリ、及び指ナデによつてナデ消す。54の凸面は繩目タタキ、凹面は一部布目痕が残るが剥落が激しい。図9～55～66は須恵器壺蓋。59～66は低平な壺蓋で、内59～64は口縁嘴状を呈する。55は復元口径約13.4cm、生焼けである。56は復元口径約11.4cm。器壁は薄い。57は復元口径約10.6cm、外面に灰かぶり箇所がある。58は復元口径約14cm。口縁部内面に、短いがしっかりした返りが付く。59は復元口径約15.9cm。天井部に扁平なつまみが付く。60は復元口径約15.4cm。61は同約14.7cm。62～64は口縁端部が鈍い。62は復元口径約14cm、63は同約13.2cm、64は同約13.4cm。65、66は扁平なつまみが付く壺蓋。67～78は須恵器壺身で、74～77は受け部が付かない。67は復元口径約11.2cm、器高約3.6cm。底部にヘラ記号を有する。68は復元口径約10.4cm、器高約3.1cm。底部は回転ヘラケズリの後静止ヘラケズリが入る。69は復元口径約11.2cm。受け部は短い。70は復元口径約9.8cm。受け部が直立する。71は復元口径約10cm。受け部は内弯した後直立する。72、73は受け部を欠失する。74は復元口径約13.4cm、底径約9.4cm、器高約3.2cm。口縁部はシャープである。75は復元口径約13.5cm、底径約11cm、器高約2.6cm。76は復元口径約15.1cm。口縁部分をゆるく内弯させ、その後若干外へつまみ出される。77は復元口径約14.8cm。76よりも口唇部が外へ開

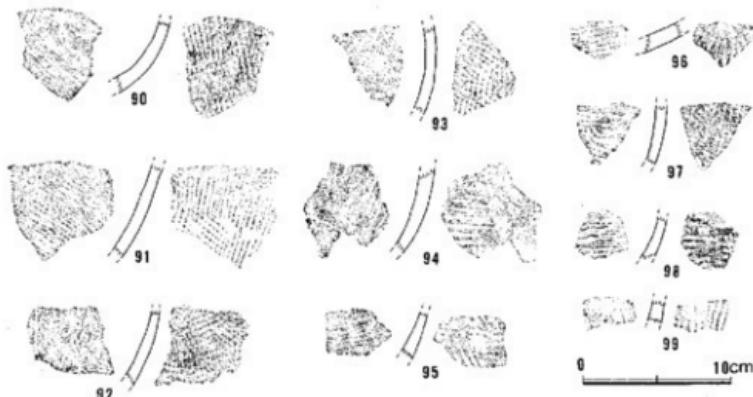


図10. 包含層及びその他の出土遺物(3)(1/4)

く。78は復元底径約10.6cm。外へ張り出した高い高台が付く。79は須恵器壺で復元口径約13cm。80は鉢。二条入の凹線の間をカキメの上からヘラ先押捺文を入れる。81は短頸壺で復元口径約6.5cm、器高約6cm。全体にカキメを施し、底部は回転ヘラケズリで成形する。82、83は壺。82は復元口径約11cm。83は底部に高台が付いていたと思われるが欠失している。84は半瓶で復元口径約8.6cm。口縁部はゆるく外反し端部は丸く整えられ、胴部にはカキメが施される。85は大甕の口縁下破片。上位に凹線が数条入り、その上からヘラ押きによる波状文が施される。86は横瓶。外面は目の細かい平行タタキ痕、内面は格子目状の当て具痕が残る。87は盤で復元口径約24.2cm。88は白磁碗の口縁部片で復元口径約16.8cm。内面に柄書き文が入る。89は青磁香炉。

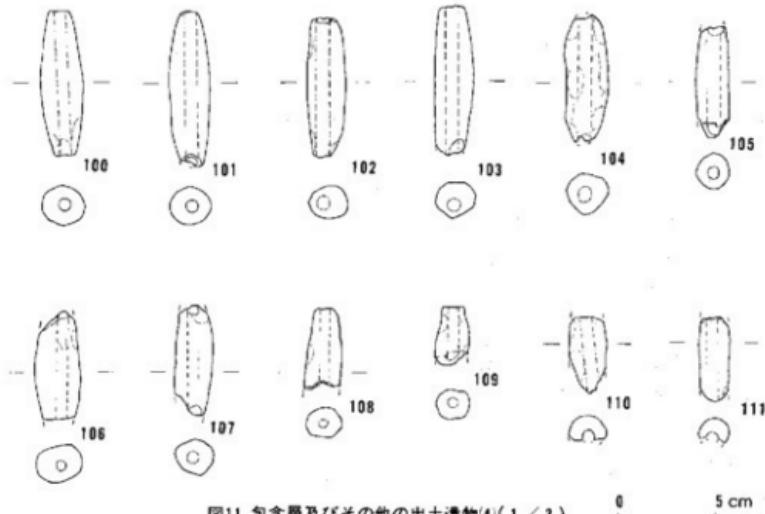


図11. 包含層及びその他の出土遺物(4)(1/3)

0 5 cm

土壤一覧表

No.	出土遺構	長さ(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	形状	遺存状態	No.	出土遺構	長さ(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	形状	遺存状態
102	S K 64	(7.0)	2.0	0.5	(22.9)	箱錐形	一部欠損	103	圓乱串	(5.6)	2.3	0.6	(19.5)	箱錐形	両端部欠損
106	瓦含層中	7.5	2.2	0.6	28.6	箱錐形	完否	107	瓦含層中	(5.7)	(2.0)	0.6	(15.6)	箱錐形	両端部欠損
103	瓦含層中	(8.0)	2.2	0.7	(25.5)	箱錐形	ほぼ完形	108	瓦含層中	(4.2)	(1.0)	0.4~0.5	(9.6)	箱錐形	約1/2残存
102	瓦含層中	(7.2)	2.0	0.6~0.7	(19.4)	略箱錐形	ほぼ完形	109	瓦含層中	(3.0)	(1.8)	0.6	(6.3)	略箱錐形	約1/2残存
103	瓦含層中	(7.8)	2.1	0.7	(24.7)	略箱錐形	ほぼ完形	110	瓦含層中	(4.0)	(2.0)	(0.6)	(7.1)	箱錐形	約1/4残存
104	瓦含層中	(6.5)	2.2	0.7~0.8	(25.9)	略箱錐形	一部欠損	111	瓦含層中	(4.4)	(1.6)	(0.6)	(7.1)	略箱錐形	約1/4残存
105	瓦乱中	(5.8)	1.8	0.6	(14.1)	略箱錐形	両端部欠損								

外面施釉する。図10-90～99は煎熬用の製塙土器。いずれも胴部片で細片のため傾きは不明確である。90は外面に格子目タタキを施し、内面は当て具痕をヘラケズリで消している。91～94、98、99は外面に平行タタキ痕、内面は円弧状に平行刻印した当て具痕が残る。91は円弧状当て具痕の間隔が狭い。94は円弧状当て具痕をナテ消しており、外面上位には平行タタキの上からハケメが入る。95～97は外面に格子目タタキを施す。90に比べて目は細かい。内面は円弧状の当て具痕が残る。97は円弧状の当て具痕の間隔が広めである。図11-100～111は土錠。いずれも形状はおおむね紡錘形を呈する。103、108は成形時の平坦面が残る。104、109は端部をつまみ出しており、指頭圧痕も全体に残る。

6. まとめ

吉塚本町第4次調査での検出遺構、遺物の整理結果を記してきた。本調査地點では、旧国鉄吉塚操車場運営による搅乱が予想した程には見られなかった。とは言え、幅6mの道路部分の調査であり、遺構の拡がりや分布については十分なる把握ができなかつた。以下調査結果を踏まえ、明らかとなつた本遺跡の土地利用状況を時期別に概述し、まとめとしたい。

弥生時代後期 調査区南側で包含層と土壌を検出した。遺物量は少ない。南東側で行われた第1次調査において、当該期遺物の集中が見られた箇所と、本調査での集中箇所とは連なつておらず、更に周辺へ拡がっていると思われる。こうしたことから、小規模な集落が予測される。

古墳時代前期 調査区南側から中央付近を主に、遺物が散在していた。布留式古段階の土器類がある。遺構としては、土壌などがある。遺物の分布は前時期より拡がりをみせている。集落は、前時期から継続してきたと思われる。

古墳時代後期 調査区全域に遺構、遺物が分布していた。遺構では、竪穴状遺構、上壙、柱穴などがあり、遺物では、土師器、須恵器、漁撈具などを検出した。

奈良時代 調査区北側を主として遺構、遺物が分布している。遺構は、土壌などがあり、遺物には、土師器、須恵器、製塙土器、瓦片などを検出した。

中世 調査区南側から中央付近で土壙1基と小量の青磁、白磁類を検出した。

本遺跡は、弥生時代後期に小規模な集落として形成され（もちろん、第2次、第3次調査において、縄文時代晚期に位置づけられる土器などが少量検出されていることを考えると、縄文晚期以来の土地利用も考えられる。）、その後古墳時代後期に至って周辺に拡大、以後、奈良時代にわたり、小規模ながら継続して集落が営まれていたものと思われる。第1次～4次調査までを概観し検出された遺物などからみると、本遺跡の集落は、漁撈や製塙といった経済活動に関わった集落であったと思われるが、既調査における碗や瓦の検出など、通有的一般集落とは異なる様相があり、何らかの公的な関係を持ち得た集落の可能性も考えられる。

図 版

図版 1



1. 調査前近景(北から)



2. 道路面除去作業(南から)

図版 2



2. 南半部完掘状況(北から)

1. 南半部調査風景(南から)





1. 北半部調査風景



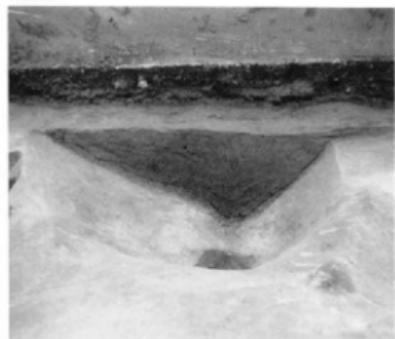
2. 北半部完掘状況



3. 調査終了時全景(北から)



図版 4



1. 土壌 SK05 土層断面（東から）



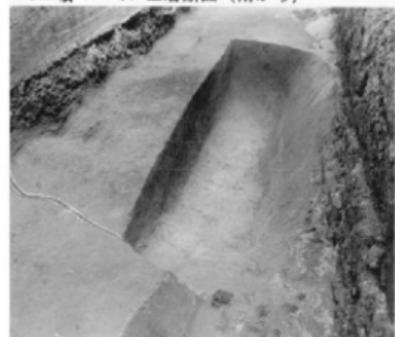
2. 土壌 SK08 土層断面（南から）



3. 土壌 SK31 土層断面（南から）



4. 土壌 SK07 半掘状況（北東から）



5. 土壌 SK06 半掘状況（北から）



6. 土壌 SK31 完掘状況（北から）